

科学者は「見た人」なのか

——子ども向け「キュリー伝」をめぐる科学者像の問題

奥山 恵

ある一つの作品が、批評の観点を一変させてしまうことがある。私にとっては、高木仁三郎の『マリー・キュリーが考えたこと』(岩波ジュニア新書 一九九二)がまさしくそのような作品だった。だが、その詳細について述べるには、キュリー伝について、いくつか確認しておきたいことがある。

じつは、何年前から女性の伝記について調べてみたいと思い、最初に注目したのがキュリー伝だった。一九三四年に六六歳で没したマリー・キュリーの子どもの向け伝記がたくさん出版されはじめたのは、一九四八、九年頃。それ以後今日まで、国際子ども図書館などで保存されているものでも九十種類以上のキュリー伝が出版されている。それらを読むと、まずいくつの特徴に気づく。たとえば、キュリー伝のほとんどは、娘エープ・キュリーが記した『キュリー夫人伝』(川口篤ほか訳 白水社 三八)を基礎資料にしていること、イギリスの児童伝記作家E・ドリーリーのキュリー伝(原題『The Radium Woman』)の翻訳・抄訳も多なこと(光吉夏弥訳「キュリー夫人」『岩波少年少女文学全集』

25所収 六一、榊原晃三『光は悲しみをこえて キュリー夫人』学習研究社 七二など)、幼年向け(武鹿悦子『キュリーふじん』チャイルド本社 九一など)やロングセラー作品(山本和夫『キュリー夫人』ポプラ社 五九など)では結婚後の研究活動についてはかなり省かれていること…。

また当初、ひとつの批評の観点として考えていたのは、子ども向け伝記におけるジェンダーの問題だったが、その点に関して言えば、多くの作品において、研究を続けながら家事や子育てにもしっかりと取り組んだ側面が強調されていること、七〇年代中ごろには子ども向けキュリー伝の出版がぐっと減ること、その時期から一般書においては、マリーの「良妻賢母」的女性の問い直しがなされていること(リード『キュリー夫人の素顔』共立出版 七五、崎川範行『キュリー夫人の生涯』東京図書 八〇など)、しかし子ども向け伝記においては、ごく一部の意識的な伝記(木村絹子『キュリー夫人』国土社 七八など)をのぞいては、そのような問い直しはほとんど反映されることがなかったこと…。私が高木の『マリー・キュリーが考えたこと』に出会った